

自己の境界と溶解の身体感覚を拡張するワークの検討

廿 日 出 里 美

Examination of Work that Expands the Bodily Sensation of Self-boundary and Dissolution

Satomi HATSUKADE

安田女子短期大学保育科

要 旨

本研究の目的は、来るべきA I時代に備えてA Iとは異なる生身の人間の「感覚力」に着目し、人とかかわる職に就く人々に向けた研修プログラムを開発することにある。これまでの研究においては、人称の身体感覚を手がかりに、パフォーマンス・アーツのワークショップにおける長期的フィールドワークを通して、対人関係専門職に就く人々を想定した感覚力の拡張を目指すプログラムの開発及び検討を行った。本論では、人称の身体感覚を拡張するワークのなかでも、①自己の境界と溶解の身体感覚、②認識主体と認識対象との一体化、③自己や周囲との対話的なやりとりに着目し、対人援助職の専門家の養成や研修で重視すべき身体感覚について、関連する研究の動向や過去に行った実践的な取り組みに照らし、考察する。

キーワード：実践、ダンス、ワークショップ、
溶解体験、身体論

はじめに

本研究は、A I時代の対人援助職¹⁾に求められる研修プログラムの開発を目的としている。筆者はこれまでの研究で、A Iとは異なる生身の人間の「感覚力」に着目し、その拡張を試みている²⁾。たとえば、保育職を目指す学生を対象とした研修プログラムにおいて、受講者が台本を書き、その稽古をし、第三者に向けて披露するようなワークは、仕事でプランを立て、実践するプロセスを、

第一線の現場と離れた場で何度も繰り返して納得のいくまで稽古でき、チームで協働して学ぶことを可能にする。決められた台本を稽古したとおりに緻密に演じることも、予期せぬできごとやその場の状況に合わせて実践を産み出すことも、稽古によって上達する。しかし、時間に制限があり、流動的な構成メンバーからなる研修には不向きである。短期間のプログラムで、過度な負担や身の危険を感じることなく、実践に应用可能な身体知を獲得できる新しい形式のワークの選定と考案が今後、望まれるであろう。そこで、本論はそのための試験的な研究である。

研修の第一義的目的は、それぞれの職務上の社会的な有用性を高めることにある。国家資格の保育士は、児童福祉法第18条の4の規定に「専門的知識及び技術をもつて、児童の保育及び児童の保護者に対する保育に関する指導を行うことを業とする者」とある。保育所における保育士の保育の内容に関する事項を定めた『保育所保育指針』のねらい及び内容には、表1のような記述がみられる。ねらいは、保育の目標をより具体化したものであり、内容は、ねらいを達成するために、子どもの生活やその状況に応じて保育士等が適切に行う事項と、保育士等が援助して子どもが環境に関わって経験する事項を指す³⁾。それらの記述は専門的知識及び技術をある程度獲得した人にとってはどれも納得のいく記述であろう。しかし、いざ実践するとなるとどのように行動したら成立したことになるのかが判然としない表現ばかり並んでいるような印象を受ける。これらの曖昧な記述を更新させるヒントを得ることを当面の課題とし、

本論では、「溶解体験」「サイバネティックス認識論」「第三の審級」「存在の他動性・偶発性と錯綜体」について文献を吟味するなかで、対人援助職の専門家の養成や研修で重視すべき身体感覚について、関連する研究の動向や過去に行った実践的な取り組みに照らし、考察する。

表1：保育に関わるねらい及び内容

- 温かい触れ合いの中で
- 和やかな雰囲気の中で
- 受容的・応答的な関わりの中で
- 安心できる関係の中で
- 体の動きや表情、発声、喃語等を優しく受け止め
- 温かく、受容的な関わりを通じて
- 子どもの多様な感情を受け止め
- 温かく受容的に関わり
- 楽しい雰囲気の中で
- ゆったりとした雰囲気の中で

[註] 厚生労働省『保育所保育指針〈平成29年告示〉』から用語を抜粋。

方 法

本研究の主題に関連する研究の動向を整理すると共に、過去に行った実践的な取り組みに照らし、考察する。取り上げる概念は「溶解体験」「サイバネティックス認識論」「第三の審級」「存在の他動性・偶発性と錯綜体」である。筆者は、保育学生ならびに保育者を対象としたワークショップとそのためのフィールドワークを2008年から現在まで、毎年欠かさず、独自に企画・開催している⁴⁾。フィールドとしたパフォーマンス・アーツは、演劇、コンテンポラリーダンス、ダンス、オイリュトミー、舞踏、古武術、わらべうた、ボイストレーニング、朗読、影絵等、多岐にわたる。本論ではダンスワークショップの事例を用いて分析と考察を行う。

結 果 と 考 察

結果と考察では、まず、本研究の主題に関連する研究の動向のなかから、四つの概念を取り上げ、整理するなかで得たヒントをもとに、過去に行ったダンスワークショップの事例の分析と考察を行う。

1) 溶解体験：矢野智司の教育論

教育学者の矢野智司は、自己と自己を取り囲む世界とのあいだの境界線が消える体験を社会学者の作田啓一にならって「溶解体験」⁵⁾と呼んでいる。溶解体験は言葉でもって捉えようとするには困難で、意味として定着させることができない過剰な部分に、その価値が認められる、と矢野は指摘する。矢野(2013)によれば、溶解体験の比類なき価値は、体験することによって、自分を越えた生命と出会い、役に立つか立たないかといった有用性の秩序とは別の次元で、生命に深く触れることができる点にあるという。それらは、自己と世界とを隔てる境界が溶解し、世界そのものへと全体的に関わり、世界に住みこみ、世界との連続性を体験する、とも述べている。そして、「この勉強が何の役の立つのか」を問い、異なる次元の差異を平板化し、功利主義=有用性の原理でもって一元化する学校において子どもたちのクラスのなかでの仲間の評価がその子どもの自己価値のすべてとなってしまうことを危惧する。そこで、矢野は有用性を目指して発達させていくことと、それだけでなく他方で有用性から離脱し生きた世界全体に触れる生成を促すということ、それら両方の課題を実現することを、教育に求めている。

2) サイバネティックス認識論：亀山佳明の円環モデル

社会学者の亀山佳明が援用するサイバネティックス認識論⁶⁾は、自己とは、個人の現実世界への適合をはかる自我を超え、さらに自我を支える個人的な無意識を超え出る拡がりをもっている、と考える。そして、人間の行為を主体と客体とを結ぶ相互因果的な円環として把握し、行為の進行は、この円環の回路の上を情報が変換されていく一連の過程として捉える。

少し長くなるが亀山(1990)によるサイバネティックス認識論のモデル化を以下、要約してみよう⁷⁾。

サイバネティックス認識=行為論においては、システム自身が自己を修正する自己言及的システムとなる。従来の認識論では、行為は主体から対象へ向かう直線的なもの想定される。それに対して、サイバネティックスでは、行為は相互因果(円環)的なものとして設定されるところに特徴

がある(図1)。最小の回路(I)を行為次元、その外部に回路(II)パーソナリティ次元、回路(III)エコシステムを想定する。

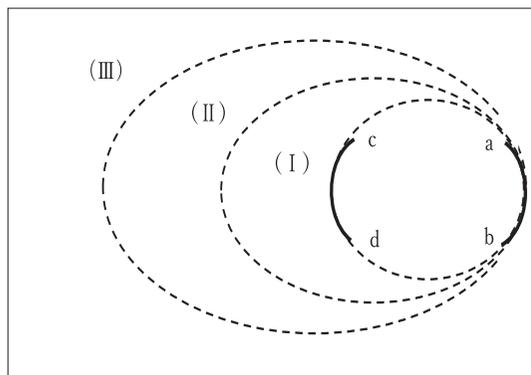


図1：自己のサイバネティクス・モデル
[出典] 亀山佳明, 1990, 『子どもの嘘と秘密』 薩摩書房, p. 218。

サイバネティクス・モデルにおいて、自己は、個人の現実世界への適合をはかる自我を超え、自我を支える個人的な無意識を超え出る拡がりをもっている。回路(II)は一部分が意識化されているが、回路(III)はそのほとんどが個人の意識の及ばない層である。回路(III)のコミュニケーションが可能となるのは、美的経験を紹介してである。

幼児においては回路(I)～(III)がいまだ分離しておらず、しかも、未分化な回路全体が、すべて実線化している状態と考えている。母親および根源的無意識から分離される過程で行為次元＝回路(I)では、主体(弧a-b)と対象(弧c-d)とが区切られ、パーソナリティ次元＝回路(II)では、意識(実線部)と無意識(破線部)とが形成される。

亀山は、芸術的経験等により、より大きな回路を通して部分が癒され、それによって部分＝自己システムの修正と統合が行われると予想し、みずからの研究では文学作品の例証を試みている。

回路(III)の学習がきわめて創造的に展開した場合、矛盾の解消とともに、個人的アイデンティティがすべての関係のプロセスのなかへ溶出した世界が現われることになるかもしれない、と亀山は予測する一方で、宇宙的(コズミック)な相互作用のエコロジーと美のなかで、存在が成り立つこと自体奇蹟だとも述べている⁸⁾。

そうした見地に立てば、実践に応用可能な身体知を獲得できる新しい形式のワークは見込めない。

しかし、分離によって外面と内面とを同時に持つ存在、つまり二重性の成立は、子どもが大人たちからの従属から自律的になり、地に足をつけてものごとを考えていくのに欠かせない。その点は、実践的なワークの選定と考案に向けたひとつの手がかりとなる。

3) 第三の審級：大澤真幸の身体論

社会学者の大澤真幸(1996)も、身体は内外に膨縮しうるものであり、その境界は生理的な客体としての「身体」の外縁(皮膚的界面)とは必ずしも合致しないと指摘する。また、究極的には、外界と自らを完全に合致させるまでに伸張することができるはずだともいう。大澤は、身体を「身体の原的規程」「関係としての身体」「超越の次元

求心化/遠心化作用を媒介にして接続する間身体的連鎖」「身体という共同体」「身体の自己像」の側面から概観している⁹⁾。

まず、「身体の原的規程」において、大澤は、身体/事物の境界が失われた身体の前・差異的な境位を、原身体的平面と呼んでいる。そして、胎児の体験は原身体的平面に近似していただろうと、想像する。

また、「超越の次元」において、大澤は、第三の審級について次のように説明する。

求心化/遠心化作用を媒介にして連結する間身体的連鎖は、ときに、連鎖内の個別の身体から独立したそれ固有の実体性を有するものとして立ち現われ、連鎖に内属する緒身体に等しく妥当する社会的な規範の選択性の帰属点として機能する超越論的な身体の座へと転態する。そのような超越論的な身体の座を、私は、「第三の審級」と呼んでいる。〈中略〉興味深いことは、第三者の審級は、諸身体の経験の蓋然的な帰結として擬制されているのに、経験の超越論的(先験的)な条件の位置を占めることになる、ということである。言わば、因果関係が逆転し、後からやってきたものが、遡行的な仕方原因として作用することになる¹⁰⁾。

ところで、他者が求心化/遠心化作用の対称

的な作動を通じて立ち現われるとするならば、したがって鏡像の自己認知の機制が暗示するように自己もまた第一次的には他者の一斑として体験されるとするならば、「自己／他者」の関係が恒常的に非対象化されるのはなぜか、ということがあらためて疑問となろう。詳述はできないが、このような非対象化については、第三者の審級が個人の身体へと固有化することを媒介にしてもたらされるものとして、説明することができる。第三者の審級の固有化は、規範化＝慣習化された行動の態勢の集合として、個人の身体の自己像の基礎的な層を環境の内に定位する。このような定位が、「身体図式」である¹¹⁾。

「もはやいないがかつていた」と見なしうる他者とは、実体化された間身体的連鎖である。この実体化された間身体的連鎖は、〈私〉が「あなた」と呼びうるような形態で〈私〉に向かい合うことがありえない他者である。こうした他者を「第三者の審級」と大澤は呼ぶ。そして、この「第三者の審級」は、他者の身体への直接の遠心化の作用がありうる、と主張する¹²⁾。

4) 存在の他動性・偶発性と錯綜体：伊藤亜紗の身体論

美学者の伊藤亜紗が著書『ヴァレリー 芸術と身体の哲学』でヴァレリーの著作を読者みずからの緒機能の「開拓」と「所有」を促す装置として鮮やかに読み解く手法は、本研究に大きな示唆を与えてくれる（表2）¹³⁾。

伊藤はヴァレリーが定義した四つの身体を次のように翻訳する。

第一の身体「わたしの身体」

第二の身体「鏡が見せる外形としての身体」

第三の身体「科学が対象とする顕微鏡や解剖によって接近可能になる身体」

第四の身体「空虚な記号としての身体」

伊藤によれば、各瞬間の予期にしがたって、私たちは行為に向けて身体を準備し、それは「隔離」をつくりだすが、その準備の仕方が、「私」と世界の出会い方を決定する。それは必ずしも能動的な自己決定にもとづく行動というわけではなく、外界からの刺激に対するリアクションとして、私たちはいわば行為されているのだ、とい

う。その際、錯綜体という概念は、それとの関係で私たちの存在の他動性・偶発性が位置づけられ、またそれに向かって私達の自己について知る度合いが拡大していくような、理論上の虚焦点として考えるべきだと結論づけている。その意味で錯綜体は、第四の身体と重なる部分が大きく¹⁴⁾、第四の身体は認識不可能な対象であり、それを認識してしまえば、緒問題が一瞬にして解決されるだろう身体である、と説明する。第四の身体は、構造化されることによって行為のために使用可能になる、ということは研修で扱う実践知として通用するかもしれない。

表2：伊藤の著書から得た実践への示唆

- 世界と主体とのあいだの「ずれ」が意味を持つ場合、持続が生み出される。
- 人は注意を受けるものを、少し受肉させる。注意は、対象を見守りつつ、しかも身体的に「注意の対象を少しずつ模倣する」ことを含んでいる。
- 主体と対象は分離できないからこそ「ずれ」が意味をもつのが注意の状態である。単なる対象の意識化においては、こうした分離不可能性は存在しない。
- 主体が内的なイメージを持つことと現実の行為の確認が連動しながら、次の行為が調整されていくのであって、それには、いつも注意が必要になる。
- 認識の対象と認識する主体が相互に呼び合うように更新されつづけるこの極限的な状況においては、「これらの事物がわたしの注意の関数なのか、それとも私の注意がこれらの事物の関数なのか、わたしは言うことさえできない」。
- 対象と主体の分離不可能性という注意の本質が極まることによって、もはや「対象」も「主体」も消滅してしまうような次元があらわれる。
- 歌やダンスが始まると、聴覚や脚に何らかの変化が起こるだけでなく、私は別様に組み立てられ、組織されたかようになる。それは睡眠から覚醒への移行と似ている。温度のようなものが変わる。私の内的な結合が他のものになる。
- 陶酔は観察者としての明晰さを失わせはするが、人間を身軽にする。
- 自分がある出来事と化するのを自分のうちに感じる。
- 個体と個体をつらぬいて生体のあいだに類的なつながりをつくりだす力がリズムである。

[註] 伊藤亜紗, 2021, 『ヴァレリー 芸術と身体の哲学』講談社学術文庫から抜粋。

次節では、伊藤亜紗の文献に散りばめられた多くの手がかりをもとに、実際のダンスワークショップの実践を試論的に読み解いてみよう。

5) カラダで遊ぶ：伊藤キムのワークショップ

先に矢野、亀山、大澤、伊藤らによる文献に沿って、①自己の境界と溶解の身体感覚、②認識主体と認識対象に着目し、実践に应用可能な身体知を獲得できる新しい形式のワークの枠組みを模索してきた。最後に、「ダンスワークショップ in はつかいち」のワークの事例を取り上げ、①②に加え、③自己や周囲との対話的なやりとりについて分析と考察を行う。このワークはダンサー・振付家の伊藤キムを講師とし、保育学生8名を対象に、2014年6月15日（日）午後2時～4時に、はつかいちさくらびありハースル室に於いて実施され

た。分析には主催関係者が撮影した動画記録を用いている。表3に2時間にわたるワーク・メニューの一部を示す¹⁵⁾。また、表4に受講者の感想の一部を示す。

表3：伊藤キムによるダンスワークショップのワーク・メニュー（抜粋）

- ワーク1：背中合わせで腕を組んだ二人組で座った状態からの起立（見えないカラダ）
- ワーク2：紙ダンス 手に何かをもったり、もっていると思って動くダンス（対象をもって動く／紙・イメージした石）
- ワーク3：カラダで会話 指先の関係（リードする・リードされる／決めごとなしで動く）
- ワーク4：即興ダンス



写真1：ワーク3 カラダで会話の様子（デモンストレーションを行う講師と受講者のペア）



写真2：ワーク3 カラダで会話の様子（条件をつけると、身体を大きさが変わったり、リズムが変わったりすることをワークで試す課題が与えられた受講者同士のペア）



写真3：ワーク4 即興ダンスの様子（観察者とダンスの行為者のタイミングを受講者が自分の意思で決められる、「出入り自由」の形式）

表4：受講者の感想（抜粋 下線筆者）

- 自分がイメージしていた表現が相手には少し違って捉えられたり、背中合わせて相手が動くタイミングがつかめたりして不思議だった。〔自己と他者の境界についての記述〕
- 紙を使って体を動かしたり、手に何かをもっていると動いたりしたとき、一瞬だが自分のカラダが紙の一部になっているんだ、今、手に石が乗っていると感じることができた。〔自己と対象となるモノとの境界と溶解についての記述〕
- 指一本や相手の呼吸のリズムなどで相手の気持ちを読み取れるということを知った。〔自己と他者の境界と溶解についての記述〕
- はじめは、頭で考えてから身体を動かしている感覚だったが、最後の一曲では周りが見えなくなっていて、何も考えずに身体が動いていて、これが自分の世界に入っていることなのだと思った。〔行為主体として自己や周囲との対話的なやりとりを行う際の身体感覚についての記述〕
- それぞれ違う動きをしているのに一体感を感じて、自分の動きや考え方も受けとめてもらえている感覚が心地よかった。〔自己と対象の境界と溶解についての記述〕

ワーク3に入る前に、講師の伊藤キムは受講者の一人と互いの人指し指の接点に決めごとなしの即興的な動きのオリエンテーションを行っている（写真：1）。伊藤は、はじめは集中力を高めていきながら、ゆっくりと丁寧な動き、二者間の距離を変化させ、離れたとき「手が伸びますよね、バランスとろうとして」「手の指先まで伸びて」と互いの身体に起こっていることへの気づきを促すような問いかけを行い、やがてどちらが動きをリードする、リードされるかを決めない動きへと導き、後半はかなり速くて激しい動きへと変化させている。その後、「ちょっと条件をつけてやる、そうすると身体の大きさが変わったり、リズムが変わったりします。やってみましょう」と、受講者同士のワークの課題に繋げている（写真：2）。オリエンテーションの最中、観ている受講者にも、伊藤とペアを組んでいる受講生の身体が刻々と変化するのが伝わっている。

受講者は、ペアになった受講者との指先と指先との接点を頼りに、そのつど微細にコントロールしながら、注意深くダンスを続け、次の段階では他者との身体的な接触をもたないときも、相手や周りの空間を感じながら踊るワークの展開に誘わ

れる。そして、イメージ、強調、強弱、高さ、移動、スピード、間隙を総合した即興ダンスが2時間のワークの最後に用意されている。最後の即興ダンスは、観察者とダンスの行為者のタイミングを受講者が自分の意思で決められる、「出入り自由」の形式をとっている（写真：3）。受講者は全体を注意深く観察し、「ここだ」と思うタイミングでダンスに参加したり、退出したりする。当日の即興ダンスは受講者と講師の伊藤キムも交え、均衡を破らずに変動したり、それまでに無い新しい刺激を投げかけたりしながら続いた。そのパフォーマンスはダンスに長年携わっている関係者が見終わったあとで「天使が舞い降りたようだった」と感想をもらすほど、観る側の者がずっと注視してられる、息を飲むような時間となった。そこには、「エコシステム」「第三の審級」「空虚な記号としての身体」を駆使して受講者と筆者を含めた見学者に伝播させる伊藤キムの確信的で秘めたはたらきが存在していた。

む す び

解剖学者は「死体は嘘をつかない」という¹⁶⁾。物質的な身体は不可分の個体として、超有機体として、生態系の一部として存在する。体内の合成と分解の均衡が崩れ、停止に向うとき、身体は徐々に、死んだ人間の身体＝死体へと変化する。その後、時間と共に死体は朽ちて自然に還る。死体は個体の死と引換えに、生態系全体の流れのなかに押し戻されていく。このサイクルに留まる限り死体は嘘をつかない。

もし、身体に「主体／対象」「意識／無意識」「秩序／無秩序」の二律背反を凌駕する領域を認めるなら、物質論では「無い」ことになっていた個体を生じさせる回路が独自に開かれるのかもしれない。そのとき、内部とは異なる外部との二重性を維持するため、新たに生じた個体は生態系のルールからの従属を連れ永遠に存在しようと、ある種の嘘をつくのではないだろうか。嘘は自律と変化の種となる。日常生活においてこの回路は隠され、簡単に覚られることはない。しかし、個人と社会は古よりそうした回路に支えられ変容してきたと考えられる。アーティストのなかには、個人の作品づくりと同様に、探究した知識と技術が

社会で活かされることに強い関心を持ち、力を貸すことに余念がない情熱をもった人材もみられる。そうした人々の知見を得ながら、もはや有用性の権化ともいえるほど一次元化に向けて加速を増す現代の教育機関において、学習者に有用性の原理を超える体験をいかに用意するかが今後の課題である。

[付記] 本研究で考案した研修プログラムの内容は平成20～22年度科学研究費補助金（基盤研究（C））「実践知の創造を支援する活動システム理論の構築」（研究代表者：廿日出里美、課題番号：2053078）、ならびに、平成23～25年度科学研究助成事業（学術研究助成基金助成金（基盤研究（C）））「実践知の創造を支援するワークショップのアクションリサーチ」（研究代表者：廿日出里美、課題番号：23531145）の助成を受けた研究成果の一部である。ワークの企画趣旨は筆者個人の見解であり、所属機関とは無関係である。

註

〔2021. 9. 16 受理〕

1. 直接、人々と関わりながら職務を遂行し、対象者を身体的、精神的、社会的に支援する実践を伴うような業務を本研究では、対人援助職と呼ぶ。対人援助職の例としては、保育、教育、看護、医療や介護のほか、ソーシャルワーカー、心理技術者等があげられる。
2. 廿日出里美, 2011, 「保育者養成という現場の日常－人々を実践に向かわせる知の再構成－」『教育社会学研究』第88集, pp. 65-86。
3. 厚生労働省, 2017, 『保育所保育指針〈平成29年告示〉』フレーベル館, p.13。
4. 廿日出里美, 2021, 「AI化時代の対人援助職に求められる研修プログラムの検討－人称の身体感覚を拡張するワークの分析から－」『安田女子大学紀要』第49号, pp. 125-136。
5. 矢野智司, 2013, 「生命性と有用性の教育に向けて」『円環する教育のコラボレーション』京都大学, pp. 15-28。
6. 亀山佳明, 1990, 『子どもの嘘と秘密』薩摩書房。
7. 前掲書, p. 218。
8. 前掲書, p. 208。
9. 大澤真幸, 1996, 「overview 身体と間身体の社会学」井上俊・上野千鶴子・大澤真幸・見田宗介・吉見俊哉編『身体と間身体社会学』岩波書店, pp. 239-254。
10. 前掲書, pp. 246-247。
11. 前掲書, pp. 247-248。
12. 大澤真幸, 2018, 『〈自由〉の条件』講談社文芸文庫, p. 105及びp. 209。
13. 伊藤亜紗, 2021, 『ヴァレリー 芸術と身体哲学』講談社学術文庫。
14. 前掲書, pp. 252-259。
15. 伊藤キムの舞台とワークショップは野口体操を想起させるという感想が聞かれる。筆者も大駱駝艦に所属する我妻美恵子のワークショップで同じような感想をもった。日本発祥の舞踏に関する身体性については、尼ヶ崎彬, 1996, 「身体と芸術－身体の脱秩序化と再秩序化－」井上俊・上野千鶴子・大澤真幸・見田宗介・吉見俊哉編『身体と間身体社会学』岩波書店, pp. 145-162に詳しい。
16. たとえば、養老孟子, 2020, 『AIの壁 人間の知性を問いなおす』PHP新書など。

コントリビューター：橋本 信子 教授
(保育科)

